主　論　文　要　旨

報告番号	㊙ 乙 第　　号	氏　名	横田　めぐみ

主 論 文 題 名

Symptoms and effects of physical factors in Japanese middle-aged women
（日本人女性における更年期症状の特徴と体格因子が及ぼす影響）

（内容の要旨）

更年期症状はエストロゲンの欠乏を主因とするが、加えて複合的な要因により多彩な症状が認められることが報告されている。近年、更年期症状の国際的な比較から、「エストロゲン低下が強く関連する血管運動神経症状と腟症状を定型的な更年期症状とし、それ以外の症状の内容や程度は文化や人種などで異なる」とする説が更年期症状を考える上で主論となっている。また、米国のコホート研究で血管運動神経症状はbody mass index；BMIの増加で症状が増悪することが示されているが、我が国の女性では明らかではない。

一方、本邦における更年期症状は血管運動神経症状の有症率・重症率が低いとする特徴が従来から報告されている。また日本人女性の痩身化が進んでおり、更年期女性においてもBMIが低下傾向にあることが判明している。

これらの背景より、本研究では近年の論調に則して日本人女性における更年期症状の特徴を検討した。また血管運動神経症状とBMIの関係についても検討を行なった。

1993年から2014年までに当科健康維持外来を受診した40～60歳の患者、計1969例を研究対象とした。また、閉経状況とestradiol; E_2、卵胞刺激ホルモン（follicle stimulating horumone；FSH）値、BMI値と更年期症状との関連について比較検討を行った。

その結果、有症率・重症率は、肩こりと易疲労感が各々一位、二位であり、これまでの報告と同様の結果を示した。前閉経期、周閉経期、閉経前期、閉経後期の4群に分類した閉経状況と更年期症状とを検討すると、血管運動神経症状、腟症状、関節痛においては、前閉経期群から閉経後期群にかけて有症率・重症率の有意な増加を認めた。E_2、FSH値に関しては、E_2 25 pg/ml以上かつFSH 40IU/ml以下（非閉経群）とE_2 25pg/ml未満かつFSH 40IU/ml越え（閉経群）の2群に大別して1612例を検討した結果、血管運動神経症状、 腟症状、関節痛においては非閉経群より閉経群で症状の増悪を認めた。BMIと更年期症状の関係については、BMI値より痩せ・正常・肥満の3群に分類して比較した結果、BMIが増加するほど血管運動神経症状、息切れ、関節痛、手足のしびれ、尿漏れが有意に増悪した。

本研究により、日本人女性の更年期症状は、定型的な更年期症状ではない肩こり、易疲労感が最上位であることが確認された。閉経状況やホルモンレベルの検討から、日本人女性においても血管運動神経症状と腟症状に関しては、定型的な更年期症状であることが確認された。また本研究で初めて、日本人女性においても血管運動神経症状がBMIの増加で増悪することが示された。

これらの結果から、日本人女性は更年期においても肥満群の比率が諸外国に比べ低いため、相対的に諸外国より血管運動神経症状の有症率、重症率が低くなっている可能性が示唆された。